

たとえ笑いは起きなくても

小林　しのぶ

「じごくのそうべえ、めっちゃめっちゃ面白かったですよ。」わが家によく遊びに来る男の子たちの中でひとときわ大人っぽい、そして人なつっこいタクトくんが私に笑顔で話しかけてきました。「え？そうなん？みんなぜんぜん笑ってくれへんかったやん。」「わるいと思って…。笑ったら失礼だと思って…。」「へえそうやったん。」

数週間前、息子のいる六年四組で「じごくのそうべえ」を読みました。落語がベースの楽しいお話ですが、教室は最後までシーンと静かなまま。「笑いどころで笑いが起きなくてすみません。」と担任の

先生は苦笑い。

心優しいタクトくんは、「(私に)失礼だと思って笑わなかった」と言っていたけれど、実際は、みんな「一人だけで笑って目立ったら恥ずかしい」と笑いたいのを堪えているように私には見えました。

後で女の子のお母さんからも「娘が面白かったと言ってたよ。お母さんが読むのと全然違った。ほんものの関西弁だった」と教えてもらえました。

別の日、五年生のクラスで「だじゃれ世界一周」を読んだ時も然り。みんな真面目な顔をして、集中して聞いている様子でした。後日、「あの日は一日中、教室でだじゃれが飛び交っていたんだって。放課後になってもまだ盛り上がっていたんだってよ。」とお母さんから聞くことができました！

小学生も高学年ともなると、知らず知らずのう

ちに「屈託」が身について、いろんなことに心を配りながら日々過ごしているのですね。子どもの世界も大変です。切なくなります。「心くばりは大人になってからで充分。もっとゆっくり、ゆっくり、大きくなってくれたらいいんだよ」と言いたくなります。だからたとえ教室にどっと笑いが起きなくても、「みんな、心の中ではしっかり笑ってくれているね。おばさんはわかっているからね。」って思います。

タクトくんも息子も今は大学生になりました。彼らの母校で私は今も読み聞かせを続けています。先日は、四年生のクラスで、ともだちを大切にしてくれねという思いを込めて「おおきなおおきな木みたい」というお話を読みました。ひとりひとりの心に語りかけるように…。

返ってくる子どもたちの真剣なまなざしに「うんうん、ちゃんと届いているね。ありがとう。」と思います。

声にならない、そして目にはみえない心のキャッチボール。今日もできたなあ。心と心が通い合ったなあ：幸せな気持ちに包まれる瞬間です。そして次はどんな思いを届けようか、胸を弾ませながら図書館へ：今日も私は子どもたちに贈る「宝探し」の旅に出かけます。

柳田邦男先生からのメッセージ
〈優秀賞〉

小林しのぶさんへ

小林さんは、長年にわたって小学校での読み聞かせ活動をしてきたのですね。しかも、低学年だけでなく、六年生にも行っているとのこと。

でも、落語のようなおかしさのある「じごくのそうべえ」を読んでも、子どもたちは全く笑わなかった。他の本でも同じ。

どうやら、「一人だけ笑って目立ったら恥ずかしい」という高学年ならではの「屈託」が身についてしまって、心を解放できないのかと、小林さんは淋しくなる。

それでも、後で子どもや親から聞くと、みんな熱心に耳を傾け、楽しんでいたことがわかり、安心する。そして、読み聞かせを続ける。四年生の子どもたちの真剣なまなざしを見て、「声にならない、目にはみえない心のキャッチボール」が交わされて

いるのを感じて、これからもいい本を選んで、思いを届けようと決意したという。

読み聞かせに対する子どもものの反応は、低学年と中高学年では、違いますよね。そういうなかで、読み聞かせに取り組む人は、迷いや自信喪失を感じることもあるでしょう。でも、いつも試行錯誤だと思って、子どもから何か学びを得ようという謙虚な気持ちで、読み聞かせを続けると、新しい世界を見出せるかもしれません。子ども一人ひとりが、どんな言葉、どんな場面に気持ちを引かれたか、感動したかといったことを、読後のくだけた語り合いのなかでつかめるといいですね。